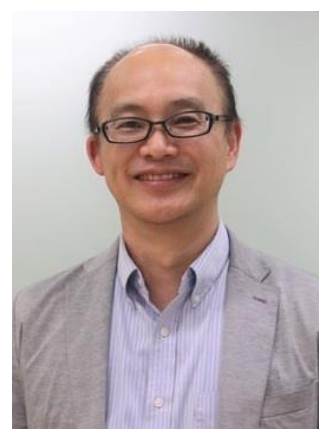


令和3年度 和歌山県発達障害者支援センター ポラリス 講演会

発達障害のある児童生徒の不登校の予防と支援

講師 鳥取大学大学院 医学系研究科 臨床心理講座教授 井上雅彦先生



令和3年3月18日(金) から3月31日(木)の間、YouTubeでの限定公開にて講演会を開催いたしました。講師には、井上雅彦先生をお招きし、「発達障害のある児童生徒の不登校の予防と支援」というテーマでご講演いただきました。講演会を聴講した内容について以下に報告します。

発達障害のある児童生徒の不登校の予防と、学校での段階的支援について、家庭連携、地域機関との連携について、お話をしました。

日本における不登校の定義とは、「病気やケガ、経済的な理由以外で年間30日以上欠席をした者」となっています。

今回のご講演では、統計資料をもとに、近年の不登校の増加、中1ギャップ、不登校の起こりやすい時期、不登校のきっかけと考えられる状況、不登校児童生徒の実態調査から学校を休んでいるときの児童生徒の気持ちについても、ご説明くださいました。

井上先生がスーパーバイザーで関わっておられた市の資料から、不登校児童生徒は心の問題だけではなく学習や特別な支援ニーズを持っていること、発達障害と不登校の関連性があることがわかりました。

不登校でも、ある程度登校できている子どもと全欠席に近い子どもではニーズや対応が異なる。学校の

役割は、不登校の予防はもちろんのこと、ある程度登校できている子ども、ほとんど登校できていない子どもによって支援方法も変えながら、より慎重に関わる必要がある。

学校にほとんど来ることができない子どもには、家庭への支援や地域の専門機関との連携がより必要である、とのお話の中では改めて学校と関係機関との連携の大切さについて考えることができました。

不登校には唯一の原因はなく、複数の要因が考えられ、その意味で個々の実態把握が大切である、ということ。学校に来るよう促すだけ、来ることを待つだけではなく、不登校の要因となった実態把握に基づいて家庭と学校の環境調整を行いながら、スモールステップで進めていくことの重要性を知ることができました。

年齢が上がるごとに学習不振が増加し、気持ちが安定して学校に行けるようになっても、勉強内容がわからない状態で一日中、学校にいるのはとてもつらい状態であり、不登校再発のリスクがあるということ。発達障害の問題を抱えている場合の学習支援や、対人関係の支援の必要性について、ご説明頂きました。

登校できるようになっても必要な支援がなければ不登校再発のリスクが上がること。欠席が長期化することで、学力的にも生活に必要な知識・技能の習得が難しくなり、社会参加が制限されることも考えられ、早期対応の必要性や、発達障害を有する児童生徒の場合は、特に丁寧な対応が大切であることを理解することができました。

不登校支援は、学校だけが頑張る、教育委員会だけが頑張るだけではなく、予算化し、自治体としての対策を進めることが重要で、不登校予防と対応をシステムとして地域全体で構築し、引継いでいくことの重要性をお話くださいました。

発達障害と不登校の関連についても詳しくご説明いただきました。不登校の子どもの5人に1人ぐらいに発達障害の傾向があり、自閉症スペクトラムの約半数に登校しづりがあること。発達障害のある子どもの不登校リスクの高さ、教師の障害特性の理解、配慮の必要性についてのお話の中では、環境調整の大切さ、登校できるようになった後の支援の有無が再発を左右すること等について教えて頂きました。

普通学級の中ですべての児童生徒を対象とした豊かな教育が実現し診断の有無にかかわらずユニバーサルな支援をすすめ、発達障害の子どもが過ごしやすくよりよく学ぶことのできる環境整備をクラス全体、学校全体で行いましょう、というお話でした。学校教育全体における配慮のポイントと本人に対する配慮のポイントを事例と共に教えて頂きました。

加えて、欠席が多いものの登校できている場合の登校しやすい環境設定、スモールステップの考え方についても、事例を交えてお話くださいました。

不安へのアセスメント、学校をとりまく家庭、地域機関の連携による子どもの環境調整とスモールステップの支援で不登校から少しずつ心が安定して学校にいけるようになった事例から、教育の機会が保障されることは、何より大切であることを改めて考えさせられるものでした。

家庭で問題行動がある場合の事例からも地域連携により保護者が安心できる体制作り、専門機関と学校の連携、環境調整とスモールステップでの支援について学びました。

家庭への支援としては、登校しづりから始まることの多い不登校の課題の共通理解について。また、早期対応については、登校を促すべきではない場合についての対応や、子どもと家族とのコミュニケーションの改善について、いくつかの事例を挙げていただきました。外出に抵抗が強い場合の支援や、不眠と昼夜逆転、インターネットとゲームについても、支援のポイントを教えて頂きました。

また、不登校の子どもとそのきょうだいへの配慮についての注意点、家庭でもできる行動活性化とそれを促すことの大切さ、そして相談できる事が何より大切であることを、お話頂きました。

不登校児童生徒の学習環境の確保にむけた今後の主な方向性については、ICTを活用した多様な学びの場を準備し、テクノロジーで教育の機会均等を保障することは、今すぐ取り組めることではないか、とのことでした。

不登校は、学校を中心に自治体全体で取り組むべき課題と捉え、データを収集して実態を整理し連携システムを作りながら、家庭、学校、地域の専門機関と行政とが連携しつつ一貫して継続的に進めていくことが、児童生徒の不登校の予防と支援につながる、ということ学びました。

井上先生のお話は、教育・行政・福祉他の関係者や支援者の役割を改めて整理し考える機会となりました。事例も交えて支援者向けにわかりやすくお話頂き、今後、関係機関が連携しさらに地域で支援する仕組みづくりに努めていきたいと考えます。

井上雅彦先生、ありがとうございました。

文責：和歌山県発達障害者支援センター ポラリス